

高 8 回 塩澤千秋

先月、2月25日に母を亡くしました。昨日が命日でした。海外に居るので親の死に目に会えぬことは覚悟してはいたものの、告別式に出られなかったのは悲しいことです。96歳、十分人生を生きただけですが、やはり子としては何時までも生きていて欲しいものです。戦時中から戦後をともに過ごした母の姿の一場面を少し書いてみました。

日本は花盛りのようですね。飯田の桜も咲き始めたのでしょうか。信州の春の息吹に思いをはせています。カルガリーは冬と春との境でしょうか、ロッキー山脈はまだ真っ白ですが、カルガリー市の近くは、ポー川の氷も大分解け流れ始め、町の周りの雪も殆ど消えました。アスペンポプラの枝先が膨らんで丸味を帯びてきました。北国にも着々と春は近づいているようです。

(March 26, 2004)

氷河をわたる風 (29)

渡り鳥 (2) -Canada Geese

この国の名前が付いた渡り鳥、カナダ雁 (Canada Geese) は、カナダのどこでも見られます。カナダ雁は子育てに北極圏に集りますが、そこからイギリスなどヨーロッパにも飛んで行く組があるようです。ロンドンで、公園の池に浮かんでいるのを見かけたことがあります。もしかしたら、日本にも飛んで来ているのではないのでしょうか。

夫婦仲がとても良く、一度ペアになると一生別れず共に過ごします。時には渡りの途中でペアの一羽が傷ついて飛べなくなると、もう一羽もそこに留まると言います。主な産卵繁殖地は北極圏のツンドラですが、一部はもっと南で子育てをします。カルガリーの近くにもそんな家族が見られます。近くの湖や川で子連れのパイプを良く見かけます。一組のパイプが連れて



写真 2 水上を列を作って泳ぐ Canada Geese の家族。先頭に立って雛を連れて行くのは母鳥、傍で警戒を怠らないのが父鳥。雛は 10 羽いますが、養子が入っているでしょう。20 羽居るのを見た人もいます。写真 1 と同じ日、同じ場所で撮影。



写真 1. 岸辺の浅瀬を雛を連れて大急ぎで横切る Canada Geese の夫婦。前方のカモメへの注意も怠りません。彼らにとって近づくものはすべて敵です。1991 年 6 月 24 日、Wyndhan-Carseland Prov. Park, Bow River の農業用ダムで撮影

ている雛の数はまちまちですが、この写真では十羽おります。実は自分たちだけの雛ではないかもしれません。迷子や孤児はもとより、時には他のペアから雛を拉致してきて自分たちの子供にしてしまうことが多いそうです。それは動物や他の鳥に襲われた時、数が多いほど自分の雛が犠牲になる可能性が低くなるからだ、と、鳥類学者は鳥に聞いて来たような事を言います。

親が沢山の雛を挟んで、列を作って泳いでいるのを近くの川で見かけます。この行列は空を飛ぶときにも守られます。行列を見ていて気が付くのは、母鳥は子

供のそばから絶対に離れませんが、父鳥は時々ふらふらと群れから離れて行く事があります。家族は泳ぐ時も空を群れで飛ぶ時も必ず一団となります。渡りで飛ぶ時は一族がさらに集り大きな群れとなり、リーダーを先頭に整然としたかぎ形や直線になって飛んで行きます。

ある秋の事、隣の州サスカチワンに鶴の一種サンドクレーンを探しに行ったことがあります。感謝祭の休みの時で、記録を見たら1997年10月13日でした。第一日目は風の強い日で寒くありました。一羽の鶴も見付けることが出来なくて、小さな町、Swift Currentの安宿に一泊しました。嬉しいことに、そのガソリンスタンドで情報が得られました。次の朝、早朝に起き出して教えられた田舎道を目的地に向かってドライブしている時、朝日が昇る少し前の明るさの中に、カナダ雁の群れを見つけたのでした。なだらかにうねるカナダ大平原、盛り上がった広大な小麦畑の中でした。



写真3. 夕暮れの空を飛んで行く
Canada Geeseの一族。親戚の2家族く
らいが一緒でしょう。飛び立ったばかり
で隊列が乱れていますが、空中で綺
麗な隊列を直ぐ整えます。1999年4
月24日 Tofieldにて撮影

かなりの群れでしたが、大きな望遠レンズを持たない身には一寸遠すぎました。手持ちのカメラのズームを最大にしてみました。そしてそこに驚くべき光景を見たのです。麦畑の中、野性のカナダ雁の群れの真ん中に五、六人のインディアンが座っているではありませんか。一般に野生の鳥は用心深く、人間などの侵入者が一定の距離まで近づくと一斉に飛び立ってしまいます。ましてや、普通の人間など、群れの中に座るなど夢のようなことです。しかし、インディアンは違うようです。殆どのインディアンは未だに彼らの伝統的な暮らしを貫いていますが、自然の中に溶け込む術を修得しているのでしょうか、野生のカナダ雁がインディアンを少しも怖がっていないのです。氷河の風

の吹く中で、カナダ雁とインディアンが自然の中に溶け込んでしまっていたのです。その時感動して撮った写真をここに載せました。カナダにはまだこんな世界が残っているようです。

親とのわかれ

先月2月25日に母を亡くしました。96歳でした。最後の2年は寝たきりになりましたが、最後まで意識ははっきりしていました。危篤から臨終まで余りに早かったため、カナダからは葬儀に間に合う飛行機が取れなくて、日本まで行くのをあきらめました。父親の亡くなった時もそうでしたが、親の死に目会えないのは、海外に住む者の宿命みたいなものです。申し訳ないと思いながら、女房と二人で、カルガリーで通夜をし、自分たちだけの告別式を致しました。私の場合は、兄弟姉妹が日本に居てくれて面倒を見てくれたから、助かりますが、身寄りが無い人はこんな場面で途方にくれる事でしょう。

母は、明治41年生まれ、穏やかそうな顔をしていて、芯のとてつもなく強い典型的な明治の女性でした。姉がいつも言うことですが、「自分のおかれた境遇に対して、愚痴を言ったことを一度も聞いたことがありませんでした」。これは私たち子供たちが母に対して共通して持つ感想です。太平洋戦争の前後、八人の子供を育て、その上、時々居候も居たそうで、今から思えば、先生の給料だけでは経済的には、かなり苦しかったに違い無い

のですが、子供達は常にうちは金持ちであると信じ込んでいました。いつも勇んで過ごす姿で子供たちにそうした事を感じさせなかったのです。並大抵な人でなかったのです。

母について強烈な印象として残ったことがあるのですが、それは、上清内路に居た頃のことです。父は先生で長野県内をあちこち移動して歩いていました。戦争も末期の頃、上清内路の小学校、当時は戦争中で国民学校と言いましたが、そこへ校長になって赴任することになりました。それは、それは山深い所、信州信濃の山奥でした。清内路峠を越えれば木曾に出られたはずですが、子供の私にとっては、峠から先は人の住まない世界、上清内路はこの世のどん詰まりでした。今だったら、奥さんに、「あなた一人で行って」と確実に単身赴任を申し渡されるような所でした。現在は立派な道路が出来て駒場から10分ぐらいで、あっという間に通り過ぎてしまう所だそうです。しかし、当時はバスも入らず、車と言え、1ヶ月に1度来る炭運びのトラック、その他の唯一の「乗り物」は権さの牛車くらいでした。

駒場から四里弱。谷に沿って曲がりくねった道は勿論舗装などしてありません。轍を残して草がぼうぼうと生えています。しかし、至る所に冷たい清水が湧き出て、その味をよく楽しみました。また、道端には野生の黄莓や熊莓が実っていて、その味は今も忘れません。しかし、歩くほか交通手段の無い所、駒場に下りだけでも大人の足で4時間は掛かったように思います。冬はもっと大変でした。かなり雪の降る所、寒くもありました。当時は戦争中、不自由の真っ最中、食べ物もあまり無い時代でした。

母はそんな中、信仰の関係から、毎月、上清内路から駒場まで歩き、更にバスで伊賀良村まで行っておりました。駒場から出るバスは歩みののろい木炭車でした。妹が最近自動車で上清内路から伊賀良まで舗装された道をドライブした所30分掛かったそうです。多分、30キロはあると思います。そんな距離を少なくとも三人の子供、1歳、3歳、5歳を連れて四里を歩き、後の三里はバスに乗りました。5歳が私で、3歳と1歳は妹たちでした。学校の休みの日は他の兄弟も一緒したようです。



写真5 朝明けの小麦畑で野生の Canada Geese の群れの中に座っているインディアンの人たち。広大な Canadian Prairie の中に人と鳥とが溶け込んでしまっています。望遠レンズによる撮影の錯覚ではありません。双眼鏡で確かめてあります。1997年10月13日撮影



写真4. 渡りを前にした Canada Geese の家族。先頭は母鳥、黒っぽいのが今年生まれた雛たち。図分大きくなりました。もう十分に飛べます。北から暖かい南に飛ぶ途中 Calgary で一寸休憩です。9月末、Calgary 市内 Carburn Park にて撮影。撮影日不明。

子供にとって、上清内路から駒場までの歩きは、それは、それは遠い道でした。そこを二人の幼児の手を引き、乳飲み子を背中に、駒場で知人宅に泊めてもらい、2日掛かりで伊賀良村まで毎月通っていました。往きは駒場で一泊して幾分楽でしたが、帰りは伊賀良から一気に上清内路まで直行でした。駒場でバスを降りると後は下清内路に村があるだけ、部落も無い山の中の道、下清内路を過ぎる頃から暗くなり始めます。星明りで歩くのが殆どでした。時には霧が出

てきて道が曖昧になったり、冬の日には雪で道と崖が分からなくなる時もありました。そんな時母は歌を歌って歩いたものでした。夜の道、特に掘割を通る時は、子供心に随分怖かったです。しかし、母も緊張していたのでしょうか、泣こうものならびんたが飛んでくるものですから、ぐっところえて歩いたものです。3歳の妹もつらかったようです。その時の、彼女の名言が今でも家族の皆に記憶されています。「道はどうして遠いのよ」。共に歩いた上清内路の道が、今、強烈な、すがすがしい母の思い出となっているのです。

置かれた境遇に愚痴を言わないどころか、それを張り切って乗り切ることで、貧乏であるのに、子供には家は大金持ちであると思込ませるそのプラス思考。ありがたいものを残していってくれました。人生の終わり、2年と言う長い別れの機会を作ってくれたので、その死は悲しいけれど、静かに受け留められるものでした。外国に居るため、頻繁に来ていた手紙が段々と来なくなり、そのうちに母は電話にも出られなくなりました。最後に会えたのは9月に一時帰国した時でした。その別れの時、「カナダに帰るよ」と言うと、すかさず「お前旅費はあるのかい」と言われました。こんな年になっても何時までも心に掛かる子供であったようです。

そしてこんな死に方も良いなと思うほどの、静かに消えていくような納得の行く死に方でした。私達は告別式に出られなかったので、母の死が実感としてありません。母は何時までも心の中で生き続けていてくれます。